



## 齋藤 清二 新連載

今回から新しく連載を始めさせていただく、齋藤清二(さいとう・せいじ)です。今年4月から立命館大学応用人間科学研究科に所属させていただいております。

3月までは富山大学保健管理センターで、医師・カウンセラーとして12年ほど働き、その前の20数年は、富山医科薬科大学(今は存在しません。旧富山大学・旧高岡短期大学との統合により、その短い生涯を閉じました。合掌)で、消化器内科・心療内科の医師として働いていました。病院と学生相談室をフィールドとする心理臨床の実践歴は約30年ほどになりますが、ここ10年くらいは、コミュニケーションに困難をもつ学生への支援と、自殺防止対策を中心とする大学生支援システムの構築と運営に力を入れてきました。私が去っても十分に機能し、持続するシステムになったと感じたので、今年をもってそこを離れることにしました。

新潟県に生まれ、東京での2年弱の研修期間を除くと、人生のほとんどを日本海側(私自身は裏〇本という言葉のほうがしっくりするのですが、最近では差別用語ということで、公の場では使用できなくなっています。表より裏のほうが多くの大切なことを含んでいるようで好きなのですが…)で過ごしてきました。京都に移り住ん

でまだ2ヶ月ほどですが、これまで経験のない古都での味わい深い生活をさっそく堪能しています。

連載の内容は、あまり真剣味のないテーマで恐縮なのですが、対人援助に引きつけて言えば、支援課程のさまざまな場面で生じる対話の中で、その人にとって最も大切なもの(好きなもの)を話題にとりあげ、それについて語ってもらったり、シェアしたり、その展開を応援したりすることが、問題の原因を探して遡っていくことよりもずっと有効であったケースを複数体験してきたということが動機になっています。何か既成の理論を借りてきて当てはめてそれでよしとするのではない考察を、ゆっくと進めて行ければと思っています。

## 石田 佳子 新連載

マレーシアで暮らし始めて約1年半が経ち、少しは周りが見えるようになって来た頃、まるでタイミングを見計らったかのように、編集長から執筆のお誘いをいただきました。

正直言って、錚々たる方たちに交ってこのマガジンに連載をさせていただく側になるとは考えてみたこともなかったので、吃驚しながら「臨床や対人援助と無縁の暮らしにどっぷり浸かっている今の私にいったい何が書けるやら?」と自問しました。

それで、思い出したのです。こちらへ来る前、唐突に「仕事を辞めて、マレーシアへ行く」とご報告した際の団先生の反応を。

私も人生半世紀以上生きていますから、「師」と呼ばれる方の中には「弟子」を所有物のように支配したい欲求が生まれることもあることも承知しております。「師」も人間ならば、心血注いで育てた「弟子」が、ある日突然勝手にどこかへ行ってしまうたら、面白くはないでしょう。

だから、(自分の中では大恩ある「師」と思っている)団先生に、確かな理由も目的もなく海外へ移り住むとお伝えした時、まったく不安がなかったかと言うと嘘になります。「いや、そんな方ではない」という期待と、これまで他の師との間で味わった苦い経験から生まれる「でもやはり、人間なもの」という不安…しかしまあ、思い切って伝えたわけです。

そうしたら先生、おっしゃいましたっけ。「そりゃ、オモロイな!行って来い!行って来い!」って。『やっぱり~!』と力が抜けて、『まったくもって“らしい”なあー!』と思いました。

結局、私が団先生を「臨床家としても人間としても見習いたい(師)」と仰いでいる理由は、こういうところ(変幻自在に物事を捉える視野の広さと、あれこれ言われなくても真意をつかんで温かく受け止める懐の深さ)にあるのだから、この人がそう言ってくれるなら、「書いてみませんか」という、その言葉に甘えよう!ちょうど自分の中にもやもやと湧いてきているものを言葉にしてみる絶好の機会を与えられたのだ!と考えて、お引き受けしました。

そういう訳で、多少なりとも「オモロイ」ことを書いて行ければ嬉しいのですが、今回は緊張し過ぎて少々硬い文章になってしまいました。そのうちに埒もない与太話になるのではないかと(それはそれで響きだろうと)我ながら恐れていますが、お読みくださった方に「オモロイな」と思われたら大成功!という気持ちでこの連載をさせていただくつもりです。どうぞよろしくお願いいたします。

## 小池 英梨子 新連載

4月からの新生活の拠点は、兵庫の特急が止まる駅の近くで、南向き三階の角部屋、静かだしオートロックまで付いて家賃3万9千円という優良物件だ。レタスと大葉とバジルを栽培できるくらい大きな出窓もあり、かなり気に入っている。でも、これを人に話すと「ワケあり物件でしょそれ!そのうち出るかもよ…」と言われることがある。そんな時、昔姉に言われた事を思い出す。

姉:「人間ってさ、嫌な人もたまにいるけど、ほとんどの人がいい人じゃん?だから、幽霊もきっとほとんどいい人だと思うんだよね。」確かに、とその考え方に納得させられた勝手に怖がってごめんなさいと反省した小学生の頃から、一人とか暗い部屋とか怖くなくなったんだよね、と思いつく今日この頃です。今回のマガジンから連載させていただくことになりました!猫と人をめぐる活動の事を書いていきます。よかつたら読んでください。

## しすてむきよたけ **新連載**

元フリーター&今もそんな感じ・喫煙者・髭面・髪の毛伸ばし中・思い返せば、生活の拠点がわりとあちこちで、今もそんな感じ。我ながらいい塩梅で、のりくらりしている者。嘆き、ぼやきが多い。

現在、清武システムズという自分でもなんだかわからない仕事を展開中。原稿の初めに綴っています。(読んだところでわかるモノではありません。)

これから、僕が経験したことを綴っていきます。

## 小林茂 **連載第二回**

(臨床心理士)

先月、ふと製薬会社のイーライリリーのIT広告に目に留まった。そこにはADHDについて紹介されており、そこにあった自己診断テストを内心ワクワクしながらしてみた。結果は、モノの見事に「医師に相談してみた方が良い」と出た。ショックというよりも、「やっぱり!!」と笑ってしまった。

私ごとになるが小学生3年生頃から学校の先生にいじめられ続けた。毎日、殴られない日や廊下で正座させられない日はなかった。そういう毎日が続くと、同級生からのいじめも起こる。嫌なもので優しくかった先生の名前よりも思い出したくもない体罰を続けた先生の名前の方が記憶に残っている。その頃から「なぜ自分ばかりが…？」と自分が呪われているか、不運の星のもとに生まれてきたのか、解決しそうな理由しか思いつかず途方に暮れていた。殴られる痛みよりも、同級生の前で殴られ続ける惨めさは苦しい限りであった。漠然と自分が生まれてきたことに嫌悪感を抱いてきた。そんな自分への客観的な原因を見出すことが発達障害というキーワードであった。自分がずいぶん遅れて、いい歳となってから臨床心理学を学び、ADHDについて知った時から「これ、自分に当てはまるわ。」と自覚するようになった。私自身が小学生の頃には、発達障害という便利な概念もなく、主観的世界では自分が感じている感覚が、他の人も感じている“普通”の感覚であろうと思っていた。それがようやく大人になって相対化できるようになり、まかりなりにも社会的な生活

を送るようになっていく。しかし、もう少し早く知っていたら、これまでのしんどい歩みを幾らかでも軽減できたのにな、と思う。だが、時代が来るのが遅かった！

臨床心理学を学び始めたのは、本業(?)ともいえる仕事から派生したためであり偶然だが、人間や社会について考え、理解する道筋の一つとなっている。対人援助の“人”の部分は、他の誰かというよりも、まず自分という人を助けることに役立っている。

## 水野スウ

21号原稿をそろそろ書き出そうと思っていた矢先、団編集長から書き手さんたちにあてた、次号×切日確認のメールがとどきました。

その中の団さんの言葉、「この場があるから記録され、次の時代に向けたメモとして残ってゆく」「検討可能な今の時代の記録はいつも必要」「何かがあった時だけではなく、私達それぞれの目が及ぶ範囲の今を、自分の言葉で整理して記述する」に、とても勇気づけられました。

今の私がしていることも、私の目がおよぶ範囲の今を、自分の言葉で整理して記述していることだと、このところ強烈に思っていたからです。

私に限らず、このマガジンに執筆されている、さまざまなヒューマンサービスの現場の方、福祉の方、教育分野の方、それぞれの目がおよぶ今を、次の時代にむけたメモとして残している、ってことなんだ。あらためてそんなきもちでみなさんの原稿を読み返した時、ここに、このマガジンという今の時代を記録する共有空間が存在していることに、とても感動しました。ありがとう！と言わせてください。

さて、今回の短信は、ちょっと長いおまけつき。

私の若い友人の長瀬正子さんがこのたび、「社会的養護の当事者支援ガイドブック ~CVV の相談支援」という本を、CVV

のスタッフと一緒にだしました。CVVは、Children's Views & Voicesの略。子どもの視点と声を大事にしながら、養護施設などで育った経験のある人たちをエンパワメントすることを目的に活動している、日本ではまだ数少ない当事者団体です。

さまざまな理由から血のつながる親のもとで一緒に暮らせない子どもの育ちを、社会でささえる仕組みや、そういう場の営みのことを、「社会的養護」と呼ぶことになったのですが、一般には、児童養護施設とか、里親、っていったほうがわかりやすいかもしれません。まだ耳慣れない言葉で、私のまわりで「社会的養護」という言葉を知ってる人は、ほとんどいませんでした。

このガイドブックを読むと、CVVは、いま施設で暮らす子どもも、社会に出た人も、この場があることで、出逢ったり、つながったり、一緒にごはん食べたりできる。そしてなかなかよそでは話せないこと、話してもわかってもらえない不安や悩みを聞いてもらえたりする、小さいけど大切な、交差点みたいな場所なんだな、ということがわかります。みんなで話し合っただけで決めたCVVの理念、その5に「おもしろく、楽しい場であることを大切にします」とあるのも、とてもいいな、と思いました。

当事者と、社会的養護に深い関心を持つひとたち(その中には、先生もいれば弁護士さんもいる)がともにスタッフになってCVVを運営してきて15年近く。その間に培われた、相談支援での大切な考え方や、ひとを支援する立場になった時に必要な情報が、当事者のインタビューもまじえていっぱい詰まっているこのガイドブック。当事者であってもなくても、支援、っていうひろい意味でいろんな人に読んでもらいたい本です。

このちいさなガイドブックが、社会的養護という言葉や、当事者支援という概念、そして、CVV という個性的な活動をしている支援の場が大阪にあること、などなど知るきっかけの一冊にもなれたら、とてもうれしいです。

本の編集とデザインは、いつも私のマガジン原稿をレイアウトしてくれている娘の mai works が担当しました。ガイドブックは、A5版 86 ページ 900 円。mai works の web shop からもお求めいただけます。

<http://mai-works.com/>



## 高垣愉佳

母が重度のアルツハイマーでグループホームに入所しています。父は既に他界している為、何かある度にグループホームから連絡が来て飛んでいかざるをえない生活です。先日も母が腰椎圧迫骨折を発端に体調を崩し、連日ホームから電話がかかり、度々訪問するという大変な状況がありました。母はもう私の名前は覚えていませんが、娘だという事は覚えているくらいの状態です。そんな母に「あんた今何の仕事してるん？」と聞かれました。色々な仕事をしているので、一つ一つ大きく紙に書き出しながら説明すると、「あんたそんなに賢かったやろか？いつの間にそんななったん？」と(笑)。「小さいころから自転車の後ろに乗せて塾ばかり行かせてもらったおかげで、そんなに賢くはないけど、ぼちぼちやっていける程度になっ

たんよ。」と言うと、少し遠い目をして、「あれな、あれで良かったんやろうかって。小さいころから勉強ばかりさせて、申し訳なかったとずっと気になってんけど、あれで良かったんか？」と聞かれました。私の名前は忘れても、若い頃の記憶やそれに伴った感情は失われていないのだという事に少し驚きました。私が「あれで、良かったんやで。結果良ければ全て良しやる。」と言った時の、母のほっとした顔が忘れられません。(注:体調不良から復活しました。まだまだ介護は続きます。)

## 浦田雅夫

学生の保育実習で幼児さんに会って、ちょっと前まで「ゲラゲラポー」と踊っていたのにいまは誰もそんなことしていない。もうちょっと前は、「でもそんなのかんけーねー」とか言ってたっけ。でも、いつの時代でも「けん玉」は流行っているんですよ。

## 見野 大介 みのだいすけ

陶芸工房 八鳥 hachi-dori

個展やクラフトフェアへの出店などで、3~5月があつという間に過ぎ去りました。多くの出会いがあり、とても実りある経験になりました。

気づけばもう初夏のような暑さが訪れ、梅雨も間もなくやってくるでしょう。そして、猛暑。

昨年は8月に京都五条坂での陶器祭に初めて出店したのですが、あそこまで過酷なものだとは思いませんでした。毎年出店してる人に脱帽です。私は…多分もう出さないと思います(笑)

夏は工房に引きこもって制作に集中し、秋のイベントラッシュに備えたいと思います。

## 早樫一男

我が家の都合により、身の回りの整理を5月の連休前後から始めました。一応のめどは5月末です。公務員生活を退職した時点で、随分整理したつもりでしたが、今回、想像していたよりも多くものを整理することになりました。その一つが、さまざまな書類関係です。これまでから、整理を

心がけていたものの、一方で、20年以上も前の書類を残していたので、今回、処分することにしました。これまでの出来事などは、私の頭の中の記憶として残っているだけになります。次に多かったのが写真類です。特に、「ネガ」の多さには、我ながら感心しました。子どもの写真を撮影することに凝った時期があったので、「ネガ」はその名残でした。書類にしても写真やネガにしても、「いつか見るだろう」と考えて、残しておいたものです。しかし、実際には、一回も見ないという状況が続いていたのです。それだけに、今回、思いきって処分できたと思っています。整理の作業を行いながら、これまでの人生を振り返る一方で、これからの人生を考えると、最小限、必要なものだけを身の回りに置いておこうと決意した次第です。

## 中島弘美

個人開業をしている大阪の CON カウンセリングオフィス中島代表・中島(みずとり)弘美です。

CON の中に研修センターを立ち上げ、和歌山で初めて「家族コミュニケーション講座」を開催しました。4 回連続講座参加者の顔ぶれは、ケアマネージャー、高齢者施設職員、医療機関職員、児童相談所職員、高校教員などで、日々家族さんたちとかかわりのある方々です。

そのメンバーで家族面接のロールプレイをすると、かなりの迫力！「わたしのやり方ややっぱり、追い込んでいく気がするわ」「こんなときいつも何をきいていいかわからなくなる！」「家族さんの気持ちなんかわかってきたわ」グループから影響を受けて、これまでの対応に対する発見、ことばかけのひと工夫、さらに家族理解が深まるなど、参加者とともに学べる講座です。

ステップアップの連続講座Ⅱが6月3日、7月1日、8月5日、9月5日いずれも水曜日 18時30分~20時30分でスタートします。

## 木村晃子

～ゼロ地点その2@ゆうぱり～人間ではない仕事

大学を辞め、自宅から離れ就職、ひとり暮らしの初めての冬を越し、春を迎えた息子。

冬の間は、休みの前日あたりに自宅に帰ってくることもあったけれど、雪が解けてからは全く連絡がない。ゴールデンウィークを前に、スケジュールの確認をしてみた。

「地域のことを色々やらせてもらっているから、休みは帰らないよ。」とのこと。イベントの手伝いに出ているらしい。遠く離れて一人暮らしをしている孫が気になる私の母が、夕張へ行きたいと言う。長女はバイト、次女は部活。時間に自由があるのは、私と母位なので、連休中に息子のいる夕張にドライブに行ってみた。

小さな駅前で、小さなイベントをしていた。出店も少なく、私のイメージする祭りごとと比べると、にぎやかさに欠ける印象もあった。

そこへ、ひよろひよろと歩いてきたのが、「メロン熊」。夕張を象徴するキャラクターだ。愛嬌をふるまいながら、その辺りにいる人に近づいていく。休みの間、イベントに訪れたお客さんたち(特に子どもたち)と、にぎやかに場を盛り上げていたらしい「メロン熊」。

「人間とは別の姿で、人に近づいていくことは楽しい。」と、自分に与えられた役割を堪能していたのが、私の息子だった。普段は、障がいを持つ子ども達の支援をしながら、休みの日には、また別の姿で地域につながっていく。そのどれもが楽しいと充実の顔を見せられると、どんな場所でも楽しむことができるのは、才能だと感じる。そして、息子の姿を誇らしくも感じる。

北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

## 藤信子

この春は、京都の数カ所に桜を見る散歩に出かけることができた。3月の終わりに御所に行くと、通りかかった自転車に乗った人が「近衛の桜が咲きましたよ」と教

えてくれた。この人から声を掛けられなかったら、中立売門から南に行こうとしていたので、見逃すところだった。4月になって佐野藤右衛門さんのしだれ桜を見に行った。次の休みは植物園の桜を見た後で、半木の道を歩いた、紅しだれにはまだ早いだらうと思ったけれど、もう五分咲きだった。次の休みの夕方は龍安寺に散歩に行き、桜の植えてある庭に行った、白い八重桜がきれいだった。今年は桜のシーズンは短かったけれど、散歩の途中いくつかの種類の桜を見ることができた春だった。

## 中村周平

私事で恐縮ですが、前回の短気で触れさせていた入院から無事に退院しました。編集に関わっている方々には大変大変ご迷惑をおかけしました。本当に申し訳ありません。ここまで高熱が続いたのは、受傷後初めての経験でした。入院後、数日間原因が分からなかったことも不安を掻き立てる要因にもなっていました。

退院後も、再発を恐れるあまり外出を控えることも多くなりました。ただ、「このまま家でビクビクしてたら何もできひん。今日元気でも明日元気いられるかわからへんにやったら、今日できることは思いっきりやらなあかんのとちゃうか」

これまで当たり前だったことが当たり前でなくなることは、痛いほど自覚していたつもりだったのですが、どこかでそのことを見て見ぬふりする自分がいたと思います。

坂本九さんには申し訳ありませんが、「明日があるさ」は無いと思って日々頑張ろうと決心させられた出来事でした。

## 浅田英輔

3月末に異動があり、県庁の障害福祉課に在籍しております。通勤時間が20分から1時間20分ほどになり、朝出る時間も帰る時間も遅くなりました。新しいところで2ヶ月ほど経ちますが、なんとかなっている感じです。「自分のやっている仕事にケリがつく」というのは対人援助場面ではあまり多くないことだと思います。この感

覚は嫌いじゃないです。でも、たまには面接したい！って思います。

## 中村正

2001年から3年程、京都御所の西側にあるラジオ局、KBS 京都で「はりきりフライデー」という番組に通った。今いくよさんと今くるよさんがメインをつとめていた。朝の9時から15分程度、大学のそれぞれの専門家をゲストに招いておしゃべりをするというコーナーがあった。時事的な用語をやさしく解説するという企画だった。記録を見ると、当時の時代を反映して、ドメスティック・バイオレンス、虐待、ストーキング、接近禁止命令、ハラスメント、ジェンダー、ひきこもり等を取り上げていた。お二人は3時間の番組をしゃべりつづけていた。マイクの周囲には飲み物はもちろんおやつがたくさん置いてあった。ゲストも交えて本当に楽しそうに話をしていた。そして話をひきだすのがうまかった。息が合っていて流れるように会話がすすんだ。一方的に聴くだけではない。難しい話をリスナーのきもちになって問いかけてくれた。こんなに上手く質問されたのははじめてだった。大学での講義よりもやさしく解説できたように思う時間だった。コミュニケーションのプロだと思った。毎回の会話を録音したカセットテープが残っている。今となっては大切な声がつまっている。すでに退職したお世話になった先輩教員たちの訃報を聞くことも増えてきた。若い世代が現代史を知らないのでも社会の問題をきちんと伝えることも痛感している。世代をつなぐ役割が多いことに気づく50代半ばとなったなとつくづく思うこの頃である。

## 坊隆史

今回も健康ネタです。年々体つきが豊満になってきている。ついに職場上司からも「おなかの貫録がついてきたんじゃない？」との指摘があった。これまでも食生活は意識してきたはず。ついに禁断の運動療法に手を出さないといけないのか…。ガンバリマス。

## 松本健輔

<http://www.hummingbird-cr.com>

HummingBird 代表



い日々だったわ。」と思い切りの笑顔で終末を迎えたいものと思っているのです。1日10回のおむつ替え(トイレシート替え)や、敷き毛布のお洗濯など手間はかかるけれど、大きくなってのお散歩も大変だろうけれど、そんなことは一緒に暮らす喜びに比べれば何のことはない。

今しかできないことの一つ。80歳になって犬のお世話は出来ないと思うから、ブライアン、ともに年を取るまでよろしくね！

## 村本邦子

春はゆっくりしていた。2年ほど前から年老いた両親の様子を見に、定期的に田舎に帰っているが、いつも慌ただしくとんぼ返りしてしまう。このGWはのんびり数日過ごしたが、案外近くに素敵な場所がたくさんあることを知る。古民家を使った工房やレストラン、カフェ。登り窯のお祭りを覗き、絵付けにも挑戦した。みなさん、スローでアートな生活を楽しんでおられる。都会であくせく働くのが無理になったら、田舎に戻るのもいいかななんて思った。

しかし、少しのんびりしていると、突然、クリエイティブに頭が冴え始め、次々と面白いアイデアが浮かんで来て、結局、忙しく走り回ることになるのがお決まりのパターン。今は後者である。ゆったりと器の大きい人になるには、まだしばらく時間がかかりそうだ。

## 國友万裕

2月で、51歳となりました。人生あと30年くらいかなあ、30年なんてすぐ過ぎるだろうなあとしみじみ思っています。この歳になると、さすがに老後のことが気にかかってきます。ぼくは、貯えがないので、働けるところまで働かなくてはとは思っていますが、大学の講師は70歳くらいまでだし、70過ぎた老人を雇ってくれるところがあるのかなあーと心配になります。それに家族がいないので、お一人様の老後になることはわかっています。

とりあえず、健康が一番なので、この頃、熱心にスポーツクラブでマッスル系のプログラムをやっています。おかげで、徐々に肩やお腹は筋肉がついてきて、シャワーを浴びたあと、鏡に自分の身体を映して、われながら、50代のわりにはいい身体だ、

とほくそ笑んだりしています(笑)。

この頃、スポルノセクシャルという新語が生まれたとのこと。スポーツとポルノを合わせた言葉で、同性愛・異性愛を問わず、シェイプアップされた自分の身体を見ていれば、性欲が解消される男性とのこと。なるほどー。俺もひょっとするとこれに近いのかもしれませんが。女性の恋人も男性の恋人もいないけど、それなりに幸せだからです。

ぼくの日常は、仕事、映画、スイミング、マッスルトレーニング、外食、人との交際などで過ぎていきます。ぼくの Facebook を見ている友人からは、「國友さんの生活って優雅よねー」と言われます。母からは、「あなたは今は青春よね。友達もたくさんできて」と言われます。今年の誕生日はかっつての教え子たちに祝ってもらいました。仕事が先生なので、若い学生たちに若さをもらえて幸せです。

最近、水島広子さんの『女子の人間関係』(サンクチュアリ出版)という本を読みました。女性度の高い女性は嫌われるという部分には共感します。恋人がいなかったら幸せではないと思込んでいる女性は、ぼくは好きになれません。水島さんも言っているけど、独身者には自由があります。これ以上の幸せはないのです。

これからは胸をはって、「俺はスポルノセクシャル！」と宣言しましょうか(笑)。

## 北村真也

京都府教育委員会認定フリースクール

「アウラ学びの森 知誠館」代表。

(<http://tiseikan.com>)

また、新しい年度が始まりました。今年の4月に知誠館の取組みがNHKで放映される機会があって、全国からお問合せをいただくようになりました。ありがたいことです。

## 古川秀明

自分の中にある、ちょっとモヤモヤした気分の講演会の出来事を書きました。恨みごとを言いたいわけではないのですが、こうして文章にするとなぜかすっきりするので不思議です。会場に残られたみなさんは本当に熱心に聴いて下さったので、話してと聴きての波長を合わせるのも、講

演の重要なスキルであることを学びました。シンガーソングカウンセラ―

## 西川友理

京都西山短期大学昨年10月の対人援助学会研究会でお話された梶原先生の「解決構築アプローチ」のセミナーが、5月に神戸で開催され、受講してまいりました。

その際、一緒にワークを行った方が、本当に偶然に、このマガジンの、私の文章の読者さんでした。

ところがその方、Nさんは特に福祉職養成に関わっている方というわけではありませんでした。

「えっ、それなのに読んで下さってるんですか！嬉しい！…と言うか、ええと、どうして読んでらっしゃるんですか？」

と伺うと、

「職業に対するアイデンティティをしっかりと考えようと思えるから。平たく言うと、仕事がんばろうって思えるんです」

と答えてくださいました。えええ何それ、めっちゃ嬉しいんですけど(興奮して文章が乱れるほど)！

そう言われて気づいたのですが、確かにこの連載の文章を書く時、第一稿目はそのつもりなく書き始めていても、いつの間にか「私の仕事って結局何やねん？」「つまりこの疑問の根底には何があるねん？」と自らに問い直しつつ、書いています。

書いて、推敲して、調べなおして、また書き直して…を重ねるうちに、だんだん自分の仕事の今が見えてきたり、最初は見えなかった問題が見えてきたり…。

「そうか、自分ではそのつもりがなかったけど、この5年の連載は、現場の事を書きながら、自分の福祉職養成人(変な言葉ですが)としてのアイデンティティを確認・補強してきた日々だったんだな。また、そういう部分を受け取って読んで下さる方がいらっしやるんだな。」

と、大変感慨深い思いをしました。

Nさん、その後、調子はいかがですか。ご機嫌で、順調にお過ごしですか。今号はあなたのおかげで書けました。ありがとうございます。

次回からも、がんばります。

## 坂口伊都

『家族の練習問題 6』をもうお読みになりましたか。様々な家族の姿が描かれ、感慨深いです。私の身近な家族で、強い個性を持っているのは実母です。子どもの頃は、この母親の存在が大き過ぎて手に余っていたのですが、今は楽しみながらつきあえるようになっていきます。

この前も、母が心臓のバイパス手術をしなければならなくなったと大騒ぎがありました。母から電話が入り、検査と手術には家族の付き添いがいると言います。しかし、母はこちらの都合も聞かずに手術日を決めてきました。その日は、かなり難しいので日をずらせないとすると、「もう決まったから」「友達にきてもらうからいい」「私なんかどうなってもいいんだ」と言い出します。だんだんとイライラしてきて、こちらも思わず「誰も行かないなんて一言も言っていないでしょう。友達は家族じゃないの。少しぐらい努力をなささい」と怒ってしまいました。そうしたら、その会話を傍らで聞いていた家族が全員たじろいでいます。これ以上電話口で母と話してられないと思い、夫に電話を代わってもらおうとしても電話を受け取ってくれません。その横から娘が電話を受け取り、「もしもし、おばあちゃん」と可愛い声で話しました。ナイス娘。ナイスフォローです。

母もこの電話で何かを感じたのでしょう。病院に電話をしてくれ、無事に手術日をずらすことができました。手術日当日、3時間ほど待たなければならぬと覚悟を決めると、1時間で戻ってきて、「手術ができなかった」と言うのです。えっ、どういうこと？と戸惑っていると、検査の結果、手術の必要がなかったということがわかりました。そんなことが起こるのだということにも驚きもしましたが、その後の母の軽快さへの変貌に笑ってしまいました。検査前までは、それなりに病人風情でしたが、もう大丈夫となってからは逞しさの塊で、看護師さんに冗談を言っています。改めて、母の丈夫さに脱帽です(笑)

## 河岸由里子

臨床心理士 北海道

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

愛犬が亡くなって間もなく1年になる。16年間、我が家の一員として、子どもたちの心の拠り所になってくれていた。子どもたちが大きくなって家から離れても、帰省する第一の理由が犬に会うことであった。そして、子どもたちが会いに来ると、30kgもある大きな体全体で、喜びを表現していた。一方私は16年間の殆どの日々を散歩させてもらった。一体全部でどのくらい歩いたのだろうか？雨の日も雪の日も風の日も…。この犬のお蔭で大きな怪我もしたが、今思えばたくさん歩いた分健康をもらってよかった。

犬の遺骸は動物専門の葬儀所で火葬にし、骨壺に入れたまま家に置いていた。お墓をどうしようか悩んでいたが、つい先日庭の片隅、かつて犬小屋があったすぐそばに埋め、大きめの石を置き、周りに花を植えた。骨壺の中の骨は真っ白で小さく、もろかった。

子どもたちには出来たお墓の写真を撮ってメールで送った。今までにモルモットやハムスター、金魚などの命も見送ってきたが、16年もの長い間の関係はずっと深い。家族がこの犬にどれだけ助けられてきたか、様々な思い出がめぐる。生き物である以上いつかは別れの時が来る。分かっているけど悲しい。ただただ感謝である。合掌

## 団士郎

### バドガオン(バクタプル) ネパール

大地震が起きて被害甚大な様子がTVニュースで流れる。最初は情報、そしてカトマンズ(ネパール)の映像。二、三日してバドガオンのダルバール広場の崩れ落ちる建物の映像が溢れた。ああ、あの寺院群が倒壊したのだ。やっぱりそうか…と思った。



2000年の夏、カトマンズに行こうなんて思っていなかった。ネパールのことなど、ろくに知らなかった。滅多にない一人旅をすることになったとき、HISの窓口担当者と話している内に決めたものだ。

バンコクで乗り継ぎ一泊の後、カトマンズ・トリブバン国際空港に着く。着陸のやっかいな空港として、世界でも有名ならしいが、私は操縦しないから分からない。ヒマラヤ山脈をかすめて降りる感じだ。(ただの感じだけ)

一週間、無目的にカトマンズに滞在した。ポカラとか、ヒマラヤトレッキングのベースの村など、現地ガイドのお薦めもあったが、行かなかった。カトマンズとその周辺の街を散策してcafeに居た。カトマンズから15キロ、古都バドガオンには二度出かけた。気に入ったcafeは、ダルバール広場の真ん中にあった。

なにか由緒ある建造物だろうと思われ、古い三階建て？の二階に上がる。狭いところだがお客も少なく、窓辺に陣取って広場を眺めはじめた。

歩き回るのにも疲れていたのだが、長い間、広場を見ていた。何か祝い事があるのだろう。老若沢山の女性が赤い布の衣装でおしゃれして、何処かに向かってゆく。独特の風貌によく似合っていて魅力的だ。

結局、3時間近く、ネパール人女性が次々に晴れ着で通るのを見続けていた。長時間の女性観察など、後にも先にもこれっきりだ。今のようスマホを持ってれば、パチパチ撮ったに違いない。

2015年、その町並みが倒壊する映像を見た。又いつか、行ってみたいと思っていた理由が変化し始めた。

## 岡崎正明

銀行や携帯ショップなどでもらう整理番号。病院やお役所でも一部で取り入れるところが出てきて、利用範囲が広がっていく印象である。

効率化とかいろいろ理由はあろうが、その中のひとつに「プライバシーに配慮せよ」というのがあるようだ。待合で名前を呼ばれると、病気や様々な事情を知られる心配があるということだろう。本文でも書いたので読んでもらいたいが(ぜひ！)、

個人情報保護というのは、最近よく聞くキーワードである。

もちろん特定の人に知られたくない病気や制度利用に対しての配慮は、あっていいと思う。しかしなんでもかんでも「番号にしろ」というのもいささか現実的でないし、「囚人じゃないんだから」という反対意見も出てきそう。

先日、とあることで家族そろってお祓いを受けることになった。結構大きな神社で、受付で名前や年齢・住所を書き、玉串料を納めて待合室へ。ほかにも何組かお客さんがおり、家族連れや会社関係らしき人など様々。10分ほどでアナウンスがあり、私たち家族も含めて待合室にいた全員が奥の祈祷所に通された。50人はゆうに入れそうな大きな部屋の正面に鏡が置かれ、うやうやしく神様が祀られている。

安産祈願、商売繁盛、病氣平癒。それぞれ切実な願いを抱えて来ている。祈祷所の独特の雰囲気もあり、みな神妙な表情で頭を垂れ、祈祷の声を聞いていた。

「ナンタラカンタラノ…」

と独特の調子で神官が祈りの言葉を捧げていく。その途中。

「岡崎〇〇。三十〇歳。〇〇〇に住まいし〜…」

おいおい。個人情報ダダ漏れじゃん。なんとなくのお客さんのことか雰囲気で分かるし…。

だがもちろん祈祷中もその後も、個人情報を読み上げられたことに異を唱える輩はいなかった。当然だろう。神様の前で「整理番号135番のお〜」などという誤魔化しは許されない。そもそも願いが届きそうにない。

プライバシー保護が通じない世界もあるのだと感じ、同時に思い出したのは故・中島らも氏が大阪の街で見かけたという、ターバンを巻いてノーヘルでバイクに乗るインド人の話だった。

何事にも適用外はあるということだろう。

## 鶴谷主一

今回の原稿を書いている最中に園児を連れて園外保育に出かけていった。

近くの公園までバスで行って広場を散策して、お弁当を食べ、食後に3つしかな

い固定遊具(20メートルほどしかない小さなローラー滑り台、ジャングルジム、緩やかでスリルのないターザンロープ)で遊んだ。

一番人気はローラー滑り台、子どもたちは何往復しただろう！何回も何回も滑っては駆け戻ってくる。年長組と年少組のペアで行ったのだが、年少児はほぼ100%走って戻ってくる。年長は時々歩く。楽しいことがあれば子どもたちは驚くほど動いて遊ぶのを目の当たりにして、今回のテーマ「楽しく運動能力アップ」を思うとき、環境があれば、大人の指導などなくても運動能力はぐんぐん伸びるのだなあと、改めて思う。

原町幼稚園ホームページ

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

## 千葉晃央

◆「障害者雇用という経験から」対人援助学会第15回(通算39回)が2015年5月22日(金)にキャンパスプラザ京都で行われました。ゲストスピーカーの中條與子さんは視覚と聴覚にハンディをお持ちで、これまで「一般雇用」と「障害者雇用」も共に経験され、そのなかで感じていることを話して下さいました。障害を伝えての就労、伝えずに就労、途中で伝えた就労などいろんな経緯で働きながら、体験されたエピソードの数々。そのなかで困ったときに相談にのってもらった労働機関の対応や、一般にピアな関係と整理される同じ障害者雇用で働く仲間とお話など、たくさん学ぶべきことがありました。中條さんありがとうございました！◆休日に釣り人として過ごしました。隣の釣り人に話しかけ、逆に「釣れますか？」と釣り人として話しかけられました。人生初の出来事でした。川に入って釣る息子に向かって、蛇が水面を泳いできた事件もあり(笑)蛇が驚いていました。結構女性の釣り人も多くて驚きました。小鮎は本当においしかった。アユの背越しに一匹だけしました。塩焼きも最高〜。釣りは今まで本当に縁がなかったなあ。やっていないことをするのはいいですね。連れて行ってくださった職場の大先輩に感謝です。

## 大川聡子

「10代の母という生き方」を連載しています。内容は2012年に立命館大学大学院社会学研究科に提出した博士論文を一部改編・修正したものです。順当に行けば、次号は若年出産を選択した母親達の経路をTEMで記述していくことになるのですが、私が書くのもおこがましいのと、この部分はあちこちで発表したり、投稿して査読者からご指摘を受けたりで、論文中で最も進化したと言えども聞こえがいいですが、全く原形をとどめていないので、執筆に時間がかかりそうだなと思っています(≠切破り予告ではありませんよ〜)。

## 大谷多加志

4月から大学院に入学し、学生と仕事の両立を図る日々になりました。大学で研究をすることが仕事を推し進め、仕事を進めることが研究へとつながるようにと考えていましたが、その循環が思惑通りに生まれつつあるように思います。ただ卒業まで3年。先は長いので、うまく循環を維持できるように、時間や気力体力の使い方を工夫していくことがこれからの課題です。

久しぶりに大学に戻って、自分が在学していた頃以上に、大学院に進学するという選択が一般化していることに気づきました。突き詰めたいと思うものがあること、探究心を持つことはもちろん尊いことではありますが、オーバードクター、ポストド問題も聞こえてくる現代です。一回り年下の若者たちの前途を心配に思う気持ちも湧き上がってきます。『人の心配より、じゃあお前はどうなんだ』という声が聞こえてきそうですが、まったくその通りです。まずは当初の目的である、K式の改訂に向けての実質的な課題を検討するために、1つずつ準備をしていければと思います。

## 竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

今回で「お寺の社会性」は最終回を迎えました。ありがとうございます。できれば次回から異なるタイトルで連載のご縁をいただければ、嬉しいものです。また、よろしくお願ひします。



## 川崎二三彦

### リフォーム完了余話

昨年夏、我が家のリフォーム着手に伴い一時的に引越してから約10か月。どうやら工事も完成して再入居し、深謀遠慮、細部拘泥、苦心惨憺した書齋にこもる日々が続いている。正真正銘アサメラ一枚板を大枚はたいて二枚購入し、天板を自慢のL字型に収めた机は完璧で、2か所の出窓にカラーレーザー複合機、テレビ、電話等々を配置、パソコンも買い換え、ついには、ここを「児童福祉執務室Guan」と名付けることに、しようかな、などと悦に入っていたら、突然ごく近くで不機嫌そうな声がある。



「あなた、押入に10箱も段ボールがあるじゃない。これ、一体いつになったら片付けてくれるの。私は困ってますからね！」

おっと、書き忘れていたけれど、リフォーム完成と軌を一にして、私の勤務状況は大きく変化してしまったのである。というのも、8年間の単身赴任生活が終焉し、4月からは週2日、1泊2日で京都一横浜を往復するようになったのだ。だとしたら、1週間のうちの残り5日は自宅書齋勤務。ならばやはり「執務室」と呼ぶほかないではないか。もちろん私は室長兼秘書兼庶務係及び部屋掃除担当職員である。



ただし、この執務室。一見すると大変環境がよいのだが、仕事をするには大変困った問題が発生した。というのも、たった6畳のスペースを一步出ると、いや、一步も

出なくとも、常に某婦人の絶えざる干渉が繰り返されるからである。

なおかつ悪いことに、6畳執務室に都合4本の書棚を置いたにもかかわらず、それらはあつという間に埋まってしまい、残った本は、段ボールに詰め込まれたまま、人目を避けてこっそり押入の奥深くしまい込まれたという次第。某婦人に発見されるのに時間がかかろうはずもなく、お叱りを受け続ける日々が続くのであった。

さいわい、ついこの間結婚したばかりの娘夫婦が、「温泉旅館を予約したから出かけてみたら」などと殊勝なことを言ってきたので、とりあえずは押入問答から離れて休戦、今宵は、淡路島・洲本温泉に



夫婦仲良く逗留しながら、身体を温め、近況をしたためているのであります。

(2015/05/31 記)

## 荒木晃子

これがアップされる頃には、特定非営利法人卵子提供登録支援団体(NPO法人OD-NET)の理事及びマッチング委員長を退任している。5月の年次総会で、既に辞任の意思表示をしたのだが、任期満了退任の方が事務手続きも簡単なのではないかと、とのアドバイスを尊重してのことだ。振り返れば、就任依頼を受けてから、はや約2年半が過ぎた。ボランティア活動の一環だったので、多忙だが対価を伴う業務でもなく、義理があるわけでも、自ら望んで就任した訳でもない。反対に、相当悩み、様々な方面で知恵や力を貸していただいている諸先生方に相談したうえでの決断だった。就任後は、社会的責任と所属することへのリスクだけは高く、随分と大きな労力と時間を費やしたように思う。当初、ある人は、「割の合わない活動だね」、別の知人からは、「現時点で、卵子提供の法整備はまだ無理だよ」、さらに「やめたほうがいいよ」とアドバイスをくれた友人の

言葉を思い出す。

丁度その時期、それまで自宅で介護していた母の症状が進行し、入院先から帰宅困難な状況にあった。病名は、進行性核上性麻痺。パーキンソン病の一種で、症状はALSの身体症状に類似した進行性の脳性麻痺だ。その6年ほど前に父を亡くし、一人娘だった私は、様々な福祉サービスの提供を受けながら、ひとりで母の介護にあたっていた。「一分一秒でも長く母のそばに付き添っていたい」とそんな思いを抱きつつ、一方では、「どんな時でも自分の人生を思う存分生き抜いていきたい」とも考えていて、後者は両親の願いでもあった。

選択に迷った時、いつも父と母の意思を確認しながら生きてきた。ふたりとも、決して答えをくれるわけではないし、指示を出すこともなかった。しかし、父と話しているうちに気持ちの整理がつき、母と話した後には、なぜか決心がつくのが常だった。時に叱咤し、時に激励しながらも、父と母はいつも私の人生を守り、導いてくれていた日々が懐かしい。

一年半ほど前のクリスマス直前、母は天国へと旅立った。最後まで、静かで美しい、大地のような存在だった。いま、大きな役目を果たした現在の私に、天国にいる父と母の言葉がきこえる。

「背負っている大きな荷物は降ろせばいい。自由になった両手を広げ、大きく背伸びして、一歩間に踏み出してみるといい。いつも見守っているから、安心して先に進めばいい。」

## サトウタツヤ

このままで行くとまた原稿を落としてしまおうと思い、とにかく何かを書いてみた。もし今回原稿を落とすとすると、実に半年間何も載らないことになる。そうなると、このまま自然消滅。。。ところが、前回の短信をみてびっくり。書く内容の予告までしていたのであった。しかし、今から前回予告を埋めることはできない。そうなると、このまま自然消滅。。。でも前回予告と違っている。でも今から書くことはできない。。。以下略。。。とういわけで、今回どうにか執筆者に残ることができました。。。